

# 琉球大学学術リポジトリ

## 名詞の文法的なかたちについて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2017-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 三寿, Murakami, Mitsuhisa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/36707">http://hdl.handle.net/20.500.12000/36707</a>

## 名詞の文法的なかたちについて

村上三寿

### はじめに

言語の体系のなかで、単語とはなにか？ と問われれば、一定の音声の連続が意味をもったものであると答えるのがもっとも一般的なことになるのかもしれない。あるいはまた、その民族の音声体系にしたがって発せられた音声現実の世界のものごととむすびついたときに、はじめてその民族の言語における単語となるということになるかもしれない。いずれにしても、単語というものが、一定の音声につつまれながら何らかの意味内容をもっているということはまちがいないだろう。民族の財産としての単語は、現実の世界のものごとひとつひとつの断片を切りとって、それを音声形式のなかに定着させているものである。〈いぬ・ねこ・つくえ・さくら・あるく・はしる・たたく・けずる・おおきい・まるい・しずかな・ゆるやかな・ゆっくり・ふんわり・すたすた・ごろごろ〉などの単語には、その民族の約束としての意味内容がうつしとられている。単語の語い的な意味 (lexical meaning) とは、音声形式にうつしとられた現実の断片である。そして、その単語の語い的な意味内容のタイプにしたがって、〈名詞・動詞・形容詞・副詞〉というふうには、単語をひとまず4つの大きな意味的なグループに分けるとするのは、おそらくどの民族の言語にとっても普遍的な分類であるだろう。わたしたちは、これらの単語をそれぞれの民族の言語のながい歴史のなかで形成されてきた約束にしたがって、ならべ、くみあわせることによって、文をつくりあげ、人間活動としての言語活動と思考活動の手段としている。その単語をつかって文をくみだてるときの約束・ルールが〈文法 grammar〉であって、単語が民族の財産であるのとひとしく、その文法体系もまた民族の財産である。

〈文法〉というものは、単語をつかって文をくみだてるときのルールであるともいえるだろうが、それは同時に、単語の面からみれば、文のなかでのそれぞれの単語の存在のし方のルールであるともいえる。単語は、それぞれの語い的な意味内容にしたがって品詞というグループに分けられるのだが、同時に、それらの単語は、その品詞性にしたがった文のなかでの存在のあり方の性格もまた、みずからの特性として合わせもっている。文のなかでの単語の線状的な配列における単語のならべ方のルール、そして、文のなかでのその配列・位置に応じた役わりにふさわしい単語の形態論的なかたちづくりのルール、これらは、単語の文のなかでの存在のあり方・存在形式である。すなわち、民族の言語における単語というものは、その存在のはじめから、語い的な意味内容を持ち、同時に、文のなかでのみずからの存在のあり方としての文法的な能力・特性もかねそなえていることになる。単語は、音声の連続という、一定の音声形式につつまれて存在しながら、その単語それ自体もまた、語い的な意味内容と文法的な形式とが統一している存在でもある。それぞれの品詞ごとにそなわっている、文のなかでの存在のあり方としての配列のし方・形態論的なかたち、こういったものが単語の面からみたときの〈文法・ルール〉ということになるだろう。

この報告では、これらの4つの品詞グループにおける単語のうちから、まず、名詞のもつ文法的なかたちについてすべていくことにする。

## 1. 名詞の文法的なかたち

名詞とはどんな単語ですか？ と小さな子どもに問われたときに、どう答えるかといえば、〈人やものや生きものをあらわす単語ですよ〉と答えたとしても、おそらくは大きなまちがいはないだろう。つまり、何らかの動作や状態や運動のなかにある物や、何らかの性質を属性としてそなえている物から、その物そのものをぬきとって（抽象して）単語としてとらえたものが名詞である。これが名詞の語い的な意味内容である。この現実の世界のできごとからぬきと

った単語としての名詞をつかって、べつのグループの品詞（たとえば、動詞）とくみあわせながら、言語の世界のなかにおける〈文〉として、できごとを再創造していくのがわたしたちの言語活動の出発点的な基本的な姿である。このとき、名詞が、①どの品詞の単語と、どのようなならべ方でくみ合わせられて文のなかに存在するか、②どのような形態論的なかたちをとって存在するかということが、〈名詞〉という単語のもつ、文のなかでの文法的なかたちということになるだろう。

- ・ ほら、あかちゃん あるいているよ。
- ・ あ、おじいちゃん ころんだ。
- ・ トラック 来たよ。
- ・ ゆうべ 星 きれいだったよ。
- ・ 沖縄の 海 とても 青いなあ。
- ・ きみの お母さん きれいだねえ。
- ・ 彼 なかなか かつこいいよ。
- ・ ぼくの お父さん トラックの 運転手だよ。
- ・ むかし おじいちゃん とても 腕の いい 獵師だったんだってねえ。

この種の文のように、名詞が文のなかで主語としてはたらき、述語とくみあわさるときには、まず、述語よりもまえにおかれて、動作の主体（し手）や属性のもち主であるという意味的な関係をあらわしている。文のなかでの主語という機能をはたし、意味的な関係において〈主体〉をあらわすときの、名詞の基本的な位置は、述語としてはたらく動詞や形容詞や名詞のまえにおかれるということである。

また、人間の動作をめぐっての、名詞のさしだすものは〈主体〉としてばかりでなく、その動作の〈客体・対象〉としてかかわることもある。

- ・ きみ けさ なに たべた？
- ・ うん、 おれ パン たべたよ。
- ・ きのう ぼく とんぼ つかまえたよ。
- ・ おととい わたし だいじな 花瓶 割っちゃったの。
- ・ きみの あかちゃん じょうずに おはし つかってるねえ。
- ・ 先週 わたし とても いい 映画 みましたよ。
- ・ わたし あなたの へそくり 見つけたわ。

このように、動作の対象となるものは、その動作の〈主体〉のあとにおかれることによって、動作の〈客体〉であるという意味的な関係をあらわし、文の構造としては〈主語〉ではなく、〈補語〉であることをあらわす。

こうしてみれば、名詞が主語としてはたらくばあいには、述語よりもまえにおかれることになり、動詞述語文における補語としてはたらくばあいには、主語よりもあとであって、そして述語よりもまえにおかれることになり、それぞれが、動作をめぐるの〈主体〉と〈客体〉という意味的な関係にあることをあらわす。文のなかでの名詞のこの〈配置のし方（語順）〉は、日本語における名詞の文のなかでの大切な存在のあり方であって、名詞の〈文法的なかたち grammatical form〉のひとつの姿である。人間の組織やグループにおいて、そのなかでの自分の役わりや立場を〈立ち位置〉という言い方であらわしたりするのも、その組織のなかでの存在のあり方をしめして、一種の存在形式に対する名づけであることと似ている。

## 2. 格のカテゴリーのなかでの名詞の文法的なかたち

上の例での動作をめぐるの主体とその直接的な客体（対象）をあらわす名詞は、形態論的なかたちからみれば、いずれも、はだか格（名づけ格 nominative case）ということになるが、文のなかでの配置のし方（語順）という存

在形式をまもることによって、その意味的な関係はしっかりとつたえることができる。文のなかでの単語の配置のし方は、単語にとっては、〈構文論的な手づきによる文法的な形式〉であり、〈形態論的な手づきによる文法的な形式〉とともに、それぞれの言語の体系のなかでの、品詞ごとの単語にそなわる大切な文法的な能力である。日本語の名詞は、〈はだか格〉という同じ形態論的なかたちをとりながらも、配置（語順）という構文論的な存在形式をとることによって、どちらが動作の主体で、どちらが動作の直接的な客体（対象）であるかという意味的な関係をあらわすことができる。しかし、はだか格の名詞による、動作の主体と客体との互いの意味的な関係というものが、会話文のように相当に場面にささえられるなかで使用されることが多いとすれば、文章のなかでもその意味的な関係を正確にあらわすために、名詞が動作の主体であれば、〈が格〉のかたちをとり、動作の客体であれば、〈を格〉のかたちをとるというふうに、名詞がべつべつの（形態論的な文法的なかたち）に分化してあらわれるというのも、現代日本語における文のなかでの名詞の存在のし方の一般的な姿であることも事実である。

しかし、それでもやはり、格助辞（くつつき suffix）がつけられていない〈はだか格（名づけ格 nominative case）の名詞〉もまた、名詞が文のなか存在するときの、その文法的な意味を実現するためのひとつの文法的な形式として、〈名詞の形態論的な体系〉のなか位置づけられていることにかわりはない。名詞は、文のなかでは、配置（語順）という構文論的な存在形式と、格形式という形態論的な存在形式とのふたつの文法的なかたちをそなえながら、その文法的な意味を実現している。

名詞は、その語い的な意味内容として人やものをさしめしめしながら、動作をめぐっての主体や直接的な客体（対象）としてかかわってくるばかりでなく、第3の参加者第4の参加者として、さまざまな意味的な関係をもって人間活動に参加してくる。それらは、あい手的な対象であったり、とりつけの対象やとりはずしの対象、道具や手段や材料であったりする。

- ・ ぼく おじいちゃんに かたたかき券 あげたよ。
- ・ わたし おばあちゃんから お人形 もらったわ。
- ・ きのうち ぼく ともだちと けんかしちゃった。
- ・ あの あかちゃん リュックに かわいい リボン つけてるね。
- ・ おかあさん 冷蔵庫の ドアから 大事な メモ はがしたでしょ。
- ・ ぼく きのうち 虫とりあみで きれいな アゲハチョウ とったよ。
- ・ わたし この 毛糸で マフラー あむの。

動作に参加してくるこのような〈人・もの〉をあらわす名詞は、〈に格・から格・と格・で格〉のかたちをとることによって、文のなかでの形態論的な文法的なかたちとして、その文法的な意味、動作との関係のあり方をあらわす。しかし、現実の世界におけるできごととしての、動作に対するこれらのひとやものの関係それ自体がすでに、〈あい手対象、とりつけの対象やとりはずしの対象、道具や材料〉として存在しているのであって、文のなかでの名詞の文法的なかたちである〈格形式〉がそれらの関係をうみだしているわけではない。名詞の〈格形式〉は、その関係のあり方の表示者にすぎない。〈オープンで つくる・フライパンで つくる〉が道具であって、〈小麦粉で つくる・たまごで つくる〉が材料であるという関係は、〈で格〉という文法的なかたちをとっている名詞それ自体の語い的な意味内容が決める。〈いもうとに絵本をあげる・たなに 絵本を あげる〉の場合の動作との関係のあり方も、同様である。〈で・に〉という名詞の文法的な格形式のしっぽ（接尾辞・suffix）が、名詞から独立した存在として何らかの関係をうみだす能力をもっているわけではない。その格形式をとってあらわれている〈名詞の文法的なかたち全体〉が、文のなかでの動詞との関係のあり方、すなわち文法的な意味をあらわすのである。名詞の形態論的な文法的なかたちとしての〈格〉とは何かと問われれば、〈動作をめぐっての人やものの関係のあり方〉をあらわす文法的なカテゴリーであると、ひとまず規定することができるだろう。〈動作や活動に参加するものごとのあいだの位置づけ〉をあらわすカテゴリーであるといってもいい。

しかし、名詞という単語のあらゆる語的な意味は、具体的な人やものばかりではない。時間名詞や場所名詞などは、ひとまとまりの人間の活動やできごと全体にとっての場面的な状況・できごと全体のとりまき・背景として文のなかに参加する。時間名詞であれば、〈はだか格〉のかたちであらわされ、場所名詞であれば、〈で格〉のかたちであらわされる。

- ・ きのう 海岸で 大きな かめが あるいて いたよ。
- ・ あした 市営グラウンドで 陸上競技大会が おこなわれます。

また、できごと名詞が〈で格〉のかたちをとってあらわされるときには、それは、あるできごとの原因・理由的な背景となる。

- ・ きのう 列車が 吹雪で ストップした。
- ・ 飛行機が 台風で 欠航した。
- ・ いもうとが かぜで ねている。
- ・ 学校の 試験が インフルエンザで 延期に なった。

これらの時間や場所や原因・理由は、述語となる動詞とだけ関係を取りむすんでいるのではなく、できごと全体の背景的なとりまきをあらわしているのであるから、文のなかでは〈補語〉ではなく、〈状況語〉である。しかし、おなじく空間や時間をあらわす名詞であっても、ありか・出発する所・到達する所・うつりうごく所・行き先・はじまりの時間・おわりの時間などの場合は、〈から格〉や〈まで格〉や〈に格〉や〈を格〉のかたちをとりながら、述語動詞との直接的な関係を取りむすぶ。

- ・ 大型フェリーが 函館港から 出発した。
- ・ この トラックは 九州まで 向かいます。
- ・ ふるい 山小屋が 頂上あたりに あります。



- ・ めずらしい とりが うらの はたけに いましたよ。
- ・ たくさんの 観光客が つり橋を 渡っている。
- ・ 飛行機は あすの 10時に 羽田空港を 出ます。
- ・ おとうとは 図書館に 行った。
- ・ 村まつりは 夕方 6時から 始まります。
- ・ 盆踊りは 朝まで 続いた。
- ・ 道路工事は 土曜日に 終わる。

こうして、文のなかでの名詞の文法的なかたちとしてのそれぞれの〈格形式〉ごとに、その名詞が動詞とどういう関係をもって存在しているか、また、文全体のあらわすできごとにとってどういう関係・位置づけをもって存在しているかについて、おおまかにみてきたのだが、おなじ格形式であっても、文のなかでおなじ配置・語順のなかに位置づけられていても、ことなる文法的な意味を実現している。

- ・ 列車が 青森駅で とまっている。(場所)
  - ・ 列車が 吹雪で とまっている。(原因)
  - ・ いもうとが 保健室で ねている。(場所)
  - ・ いもうとが かぜで ねている。(原因・理由)
- 
- ・ おねえちゃんが 小麦粉と バターで クッキーをつくる。(材料)
  - ・ おねえちゃんが オーブンで クッキーをつくる。(道具)
  - ・ おねえちゃんが 台所で クッキーをつくる。(場所)
  - ・ おねえちゃんが バレンタインで チョコをつくる。(目的・背景)

- ・ おにいちゃんが コンビニに 行く。 (行き先)
- ・ おにいちゃんが バイトに 行く。 (目的)
- ・ おとうとが トイレに 行く。 (行き先)
- ・ おとうとが おしっこに 行く。 (目的)

こういった文法的な意味のちがいをくりだすのは、名詞という単語それ自体にそなわっている〈語的な意味内容〉そのものの特性・性格のちがいである。すなわち一定のカテゴリカルな意味( **categorical meaning** )をそなえている名詞の、その文法的なかたち全体が文のなかで〈一単語〉としてはたらく、〈文法的な意味〉を実現しているのであって、名詞の格形式としての文法的なかたちのしっぽである(格助辞(くつつき・suffix))が単独にひとつの品詞として何かの関係をつくりだしているわけではない。〈格助辞(くつつき)〉は、名詞の形態論的な文法的なかたちのしっぽ(単語の変化形の一部)として、その名詞のもつ文のなかでの他との関係づけをしめす表示者(marker)にすぎない。語的な意味内容をもつ名詞それ自体が動詞との関係もっているのであり、文全体のなかでの位置づけ・関係をもっているのである。

だからこそ、場面にささえられた日常会話のなかで、名詞が〈はだか格〉のままてつかわれても、大きな混乱やまちがいがおこらなかつたり、外国人や小さい子どもが言いまちがいをすることがあっても内容をうけとめ、名詞の格形式をただしてやったりすることが容易なのである。名詞の語的な意味内容の力と、その名詞とむすびつく動詞の語的な意味内容にささえられている。

- ・ おとうさん うみ 行ったよ。 (行き先)
- ・ おとうさん つり 行ったよ。 (目的)
- ・ おかあさん デパート 行ったよ。 (行き先)
- ・ おかあさん 買い物 行ったよ。 (目的)
- ・ おにいちゃん コンビニ 行ったよ。 (行き先)
- ・ おにいちゃん バイト 行ったよ。 (目的)

【名詞の格形式】	【 その名詞の格形式のもつ文法的な意味 】
はだか格	動作の主体（属性のもち主）・活動の主体 動作の客体・活動の直接対象 できごとのなりたつ時間
が格	動作の主体（属性のもち主）・活動の主体 態度の対象
を格	動作の客体・活動の直接対象 うつりうごく場所（空間名詞）
に格	あい手対象（人やいきもの）・活動や態度の対象 とりつけるところ ありか・行き先（場所名詞） 目的（動作性名詞） なりたつ時間・はじまる時間・おわる時間
から格	あい手対象（人やいきもの名詞） 材料（もの名詞） とりはずすところ 出発点（場所名詞） 原因・理由（できごと名詞） はじまる時間
へ格	あい手（人名詞）・行き先（場所名詞）

と格	あい手対象・なかま
で格	材料・道具・手段（もの名詞） なりたつ場所 原因・理由（できごと名詞） 目的（イベント名詞） おわる時間
まで格	到達点 おわる時間（範囲）

きわめて概略的なものであるが、名詞の格形式が動詞との関係や文全体のできごととの関係において実現する文法的な意味はすくなくともこのぐらいはある。名詞それ自体のカテゴリカルな意味や動詞との関係のなかでつくられる、「一単語としての名詞」の文法的なかたちのもつ文法的な意味である。

ここまで具体的にのべてくれば、若い世代の人たちは、一単語としての名詞の文法的なかたちということについて、名詞の格変化における格助辞（くつき suffix）について、自分の目でみて、十分にかんがえたうえで納得してうけとめる。

- 文の中で名詞についている「が」や「を」に意味があるのではなく、名詞の文法的な形が意味をもっていることが、説明をきいて分かりました。
- 学校では、名詞は活用しないし、格助詞をつけると学んできた。あのとき、「“で”だけで意味持ちすぎ!!!」と思っていたが、良く考えたら違うよなあと思った。確かに「で」には多くの意味が含まれているが、そ

れは「で」が決定しているのではなく、その名詞が決定させているのだと  
きちんと理解できた！ちょっと嬉しい！！

- 日本語では、名詞は文の中で〈格のくっつき〉をともなって存在している。『犬が ねこを おいかける。』という文の場合、「犬が」という文法的なかたち（grammatical form）は、「主体」という文法的な意味（grammatical meaning）をもち、「ねこを」というかたちは「客体」になるという意味をもつが、『犬にえさを あげる。』の「犬に」はあい手の意味になり、『たなに 本を あげる。』の「たなに」は場所の意味になるように、格助詞だけが名詞の grammatical meaning を決めるわけではなく、名詞の種類（categorical meaning）も決めていることがわかった。日本語の名詞のとり文法的なかたちには、格助辞のくっつきをともわずに、語順だけでも意味が通じる文法的なかたち〈はだか格〉もあることがわかった。
- 〈はだか格〉の名詞をつかって文をつくっても意味がつかないということはありません。それは名詞自体が意味をもっており、名詞（単語）のもっている意味的なタイプが文法的な意味を決めているからです。〈格〉はあくまで suffix で“しっぽ”です。『電車が \_\_\_\_\_ で とまっている。』という文で、現象名詞と場所名詞が入るということを瞬時に判断できることなどがその証明になります。

しかし、それでもなお、「日本語は膠着的（こうちゃくてき）な言語だから……」とか、「動詞の〈あるいた・ころんだ・こわされる・たたかれた〉あたりは、動詞の活用形として一単語とするのは、まあ何とか受け入れてもいいけど、名詞の方は……」とか、名詞の文法的なかたちという、言語学としてのきわめて普遍的な姿をいまだに受け入れられないでいる、自称「日本語学者」たちもまだいる（旧来の国語学者が看板をかけかえただけにすぎないのだが）。国語学・国文法から日本語学と看板だけをかけかえてみせても、なかみは戦前

のままである。そもそも「膠着的（こうちやくてき）な」というのは、「屈折的な」とならんで、「単語の変化形」のつくり方に名づけた言語学の用語であって、一単語としての単語の文法的なかたちづくり（総合的な変化形）のタイプのひとつである。ドイツ語やロシア語の名詞もやはり格変化するのだが、それは屈折的なタイプであり、朝鮮語（韓国語）や日本語は膠着的なタイプである。英語の名詞のいわゆる「所有格 dog's tail」もまた、名詞の格変化形であって、膠着的なタイプである。「日本語の名詞が膠着的である」と言ったその瞬間にそれは「日本語の名詞は接尾辞(suffix)のつけくわえによる変化形のつくりのタイプである」と、みずからの口から言っていることになる。格助辞の「が」や「を」や「に」や「で」が何らかの意味をもちあわせている品詞としての独立性をもつ「一単語である」とするならば、「犬が」「犬を」「犬に」は複合語（あわせ単語）ということになり、語い的な意味のことなるべつべつの単語になってしまう。そんなことはありえない。これらは同一の語い的な意味をもつ単語の「文法的なかたち」である。

これは学問の発展における「たんなる認識のレベル」の問題であって、見解や学説のちがいの問題ではないだろう。みずからのたずさわっている日本語学という学問において、国語学の主観主義のレベルではなく、世界の言語学の常識のレベルで、日本語の言語現象に対して客観的にむかっていく姿勢があるかどうかというだけのことである。言語教育のたちばからいえば、若い世代の人たちに、どのレベルで日本語のゆたかなしくみや整然とした体系をさづけ、さまざまな外国語の習得に役だつ普遍的な知識をさづけ、彼らにどのレベルでものごとを考え、世界の学問の発展においてどのレベルで寄与する人間になってほしいかというだけのことである。

### 3. とりたてのカテゴリーとならべのカテゴリーにおける名詞の文法的なかたち

日本語の名詞の「格変化という文法的なかたちづくり」におけるその「膠着

的（こうちゃくてき）な姿」は、〈とりたてのくつつき〉〈ならべのくつつき〉のなかにもはっきりとあらわれている。世界の言語学における「膠着的な文法的な接尾辞」というのは、「かさねあわせ」が可能であるという特徴ももつ。すなわち、もうひとつの（あるいはふたつの）文法的な接尾辞をつけくわえることによって、その単語の文法的なかたちにくらみをもたせ、さらに他の文法的な意味をかさねあわせることである。接尾辞（suffix）をかさねあわせることによって、文法的な意味が層をなすことになる。

- ・ぼく おばあちゃんには お手紙 届けたよ。…… [おじいちゃんには まだ]
- ・わたし まりちゃんとは あそんだよ …… [ひろしくんとは あそばなかった]
- ・ぼく おじいちゃんからは おとしだま もらったよ。
- ・クッキーは フライパンでは つくれないねえ。
- ・ぼくたち 海へは キャンプに きました。
- ・あそこの 公園では キャッチボールが ゆるされているよ。
- ・がんばったけど、 山の 頂上までは のぼれなかったな。
  
- ・ぼく おばあちゃんにも お手紙 届けたよ。…… [おじいちゃんにも …… ]
- ・わたし まりちゃんとも あそんだよ …… [ひろしくんとも あそんだ]
- ・ぼく おじいちゃんからも おとしだま もらったよ。
- ・この おかしは 電子レンジでも つくれます。
- ・ぼくたち 海へも キャンプに きました。
- ・こっこの 公園でも キャッチボールが ゆるされているよ。
- ・あの 冒険家は 北極までも あるいて 行ったんだよ

これらの名詞のかたちには、動作やできごとをめぐっての人やものごとの関係のあり方・位置づけをあらわす「格」としての文法的な意味と、文のなかにはあらわされてはいない、現実の世界におけるべつの人やものごととの比較・関係をあらわす「とりたて」「ならべ」という文法的な意味とのふたつの文法

的な意味がかさねあわされている。つまり、ふたつの文法的な接尾辞(suffix)をあわせもつ「ひとつの文法的なかたちとして」ふたつの文法的な意味をもつ。

〈とりたて〉とか〈ならべ〉とかいう名詞の文法的なカテゴリーは、「格」のようにひとつの構成物としての文のなかでのその名詞の位置づけ・関係のあり方を問題にするのではなく、「言語外の現実が存在する、その名詞がさしめすものとおなじ種類のものごと」との関係の問題にする。すなわち、単語レベルでの比較・対照をおこなうカテゴリーである。これらの〈とりたてのくつつき〉や〈ならべのくつつき〉がかさねあわせられた名詞は、ふたつのことなるカテゴリーにおける接尾辞(suffix)がつけられているだけであって、一単語としての文法的なかたちであることは言うまでもない。

(注)

接尾辞「も」についていえば、名詞と名詞という単語レベルでの比較・対照ばかりでなく、できごと全体をめぐっての文の陳述性にかかわる文法的な意味をひきうける場合もあるが、ここではふれない。

『日本語文法・形態論』（鈴木重幸著1972）においては、「とりたてのくつつき」のカテゴリーにはいるものとして、「は」「も」のふたつをあげて、「ならべのくつつき」としては、「と」「や」をあげたうえで、さらに「も」もならべのくつつきとしてつかうことがあるとしている。ここでは、おなじく言語外のものごとへの比較・対照をあらわすカテゴリーでありながら、その意味内容のちがいがから、あえて「は」をとりたてのくつつきとして、「も」をならべのくつつきとしてさしだした。



さらに、〈とりたて〉や〈ならべ〉のカテゴリーを、名詞の形態論的なかたちづくりの体系のなかでみれば、つぎのようなことがはっきりする。

- ・ おかあさんは もう 駅に つきましたよ。 …… [おとうさんは まだ]
- ・ おにいちゃんは やさしいよ。 …… [おねえちゃんは ちょっと こわい]
- ・ 彼は ヒーローだし。 …… [ぼくは ふつうの 人]
  
- ・ おとうさんも やつと 駅に ついた。 …… [おかあさんも ついてる]
- ・ 博物館も にぎやかだねえ。 …… [美術館も なかなかだったけど]
- ・ トンボも 昆虫です。 …… [カブトムシも 昆虫]
  
- ・ ぼく プリンは たべたよ。 …… [アイスクリームは たべてない]
- ・ わたし イルカは 見たよ。 …… [クジラは 見られなかった。]
  
- ・ ぼくの おとうさん ダンプも 運転するよ …… [トラックも 運転する]
- ・ ぼくの いもうと カタカナも よめるよ。 …… [ひらがなも よめる]
  
- ・ 日曜日は ぼくたち 海に いけるね。 …… [土曜日は だめ]
- ・ 来年も わたしたち 会えるね。 …… [ことしも 会えた]

動作の主体や属性のもち主をあらわす名詞、動作や活動の直接的な客体や対象をあらわす名詞、できごとのなりたつ時間をあらわす名詞は、述語動詞との関係における語順（単語の配置）をまもることによって、あるいは、その語い的な意味内容の性格のおかげで、〈はだか格〉のかたちとして文のなかに存在することができるのだが、この〈はだか格〉の名詞もまた、やはり〈名詞の文法的なかたち〉のひとつとして、名詞の格変化のパラダイムのなかにしっかりと位置づけられているということは、このような〈とりたて〉や〈ならべ〉の接尾辞をかさねあわせる文法的なかたちづくりのしくみのなかにも、はっきり

とあらわれている。格助辞の「が・を」に〈とりたて〉や〈ならべ〉の接尾辞をかさねあわせていないのは、格助辞の省略ではなく、もともと、〈はだか格〉という名詞の文法的な格形式であるからである。屈折的な格変化をするロシア語においても、動作の主体や直接的な客体をあらわす名詞（とりわけ、語幹が子音でおわる男性名詞）は〈はだか格（なづけ格・なまえ格 nominative case）〉という文法的なかたちによって、文のなかでの役わりをはたす。

【格変化のかたち】	【とりたてのかたち】	【ならべのかたち】
はだか格　ねこ が格　ねこが を格　ねこを	ねこは ねこは ねこは	ねこも ねこも ねこも
に格　ねこに と格　ねこと から格　ねこから で格　あみで へ格　うみへ まで格　うみまで		ねこにも ねことも ねこからも あみでも うみへも うみまでも

文のなかでの名詞の文法的なかたちは、形態論的なかたちの体系としてみれば、うえのようなパラダイムをつくっている。動作やできごとをめぐる関係づけをあらわすカテゴリーとしての〈格のかたち〉、言語外にある同種の他のものごととの比較・対照的な関係をあらわすカテゴリーとしての〈とりたてのかたち〉と〈ならべのかたち〉の3つである。これらはそれぞれ、〈接尾辞ゼロのかたち〉〈ひとつの接尾辞のかたち〉〈ふたつの接尾辞のかさねあわせ

のかたち) となっているが、文のなかでは、「一単語である名詞の文法的なかたち」として存在し、文法的な意味をもつ。

#### 4. 文の意味的な構造における名詞の文法的なかたち

形態論的なかたちとしての名詞の文法的なかたちは、ひとまず、この3つの文法的なカテゴリーにおける文法的な意味を背負って文のなかに存在していることになるのだが、構文論的な問題としてとらえてみれば、主語と述語との意味的な関係においても、その内容的なちがいが名詞の文法的なかたちにも背負わされる。

- ・ あつ、あかちゃんが 立ったよ。
- ・ ほら、かもしかが 山の 斜面を のぼってるよ。
- ・ あした、おねえちゃんが 北海道から かえってくるねえ。
- ・ 今朝、おおきな 漁船が 大漁旗を たてて 港に 入ってきました。
- ・ 岩手山が あさひに かがやいているよ
  
- ・ 山の 頂上で みる 星は とても きれいですよ。
- ・ わさびは からい。 うめぼしは すっぱい。
- ・ ブリは さかなです。 イルカは ほにゅうるいです。
- ・ おにいちゃんは 高校生です。 おねえちゃんは 会社員です。

文は、その意味的な内容として、ひとまとまりのできごとやものごとをうつしだしているというのは、ごくふつうの言い方であるが、その内容は、具体的な現象としての〈できごと〉と一般的な属性としての〈特性や質〉とに大きくわかれる。きわめておおまかな言い方をすれば、述語の品詞として、〈動詞述語文〉〈形容詞述語文・名詞述語文〉というわけ方としてとらえることもできる。述語との関係において、主語は、意味的には、〈動作の主体・状態の主

体・属性のもち主)であって、その〈主体性〉という点では共通している。名詞の形態論的なカテゴリーとしての〈格〉のカテゴリーからみれば、述語との関係づけの点では、基本的には〈はだか格〉か〈が格〉の文法的なかたちであらわされることになる。

しかし、うへの例のように、述語との関係においては、おなじく〈主体〉であっても、その文のもっている意味的な内容のタイプによって、主語におかれる名詞の文法的なかたちにつかひわけ(分化)がなされる。おなじく文のなかで主語である名詞が

「——が」の文法的なかたちをとるか、「——は」の文法的なかたちをとるかというつかひわけの問題は、本来の意味での〈格〉のカテゴリーの問題でもなく、〈とりたて〉のカテゴリーの問題でもない。文のもっている意味内容が、「ある特定の時間のなかでおこる具体的なできごと・具体的な現象」をえがきだしているか、それとも「まったく完全に、あるいは、ある程度、時間から解放されたなかでの一般的なできごと・一般的な現象・その物にそなわっている特性や質」をさしだしているか、という問題である。文の意味内容の「時間的なありか限定性のありなし・個別性と一般性」の問題である。構文論的なカテゴリーとしてのこれらの問題はきわめてひろい範囲にわたっていて、そのランクも実にさまざまであるだろうが、人間は、きわめておおざっぱに、ふたつに分けきって、それらをシンプルにふたつの文法的なかたちで区別する。動詞述語文であっても、主語になる名詞が「——は」の文法的なかたちをとることによって一般性をあらわし、形容詞述語文であっても、主語になる名詞が「——が」の文法的なかたちをとることによって、現象の具体性をあらわす。

- ・ 地球は 太陽の まわりを まわります。
- ・ サケは 秋に なると、川を のぼって きます。
- ・ カワセミは いきおいよく 水に とびこんで さかなを つかまえます。

- ・ うちの おじいちゃんは 毎朝 散歩します。
- ・ ひろしは よく 授業中 いねむりします。
  
- ・ ふう、 空気が おいしいねえ。
- ・ わあ、 海が とても きれいだよ。
- ・ ゆうべ 星が すごく きれいだったよ。
- ・ ことは 紅葉が とくに あざやかだったなあ。

こうして、主語の位置におかれる名詞の文法的なかたちのふたつのつかいわけのなかには、主語と述語との意味的な関係のちがいが、あるいは、述語の意味的なタイプのちがいが、さらに、より正確に言えば、文のもつ意味内容の性格のちがいも背負わされていることになる。

## 5. 文の機能的な構造における名詞の文法的なかたち

こういった内的な意味的な構造をもつ文はまた、当然のことだが、はなし手ときき手とのあいだになされる（通達の構造のなかでの存在）でもある。コミュニケーションの場面でつかわれるひとつひとつの文は、それ自体が、通達のもっとも小さな単位として、ひとまとまりの意味内容をもっているのだが、その文がつかわれている通達活動全体・コミュニケーション活動全体もまた、一定のテーマのもとに統一された、より大きなひとまとまりの活動としての存在でもある。その活動のなかで、はなし手ときき手は、ある話題（テーマ）をめぐる、たがいに〈テーマ〉としてさしだしたり、それについての新しい情報を〈ニュース〉としてさしだしたりすることになる。通達の単位としての文は、一定のひとまとまりの意味内容を主語と述語との関係のなかにつしとりながら、同時にそればかりでなく、通達の構造全体のなかでの〈テーマ〉と〈ニュース〉という関係も、文の内部構造のなかで背負うことになる。これは文の内部における（機能的な構造の問題）ある。

文の内部におけるこういった機能的な構造は、世界のさまざまな言語においては、その言語体系全体のしくみにしたがって、さまざまな表現手段をうけて持っているのだろうが、大きくは、文のなかでの〈テーマとニュースとの配置のし方〉、あるいは、主語と述語との配置のし方（語順）、あるいは、何らかの形態論的なかたちとしてあらわされるかということになるのだろう。

- ・ （だれが きょうの 給食とうばんかなあ？）
  - ・ 給食とうばんは ひろしくんです。……（テーマ）
  - ・ ひろしくんが 給食とうばんです。……（あたらしい情報）
  
- ・ （何か 黒いものが はたけを よこぎって いったぞ。）
  - ・ よこぎって いったのは くまだよ。……（テーマ）
  - ・ くまが よこぎって いったんだよ。……（あたらしい情報）
  
- ・ （あそこの 店では 何が いちばん おいしいかなあ？）
  - ・ いちばん おいしいのは ラーメンだよ。…（テーマ）
  - ・ ラーメンが いちばん おいしいよ。…（あたらしい情報）
  
- ・ まりこちゃんが ジャンケン大会の 優勝者でーす！
- ・ あの 人が 有名な 推理作家よ。
- ・ ここに いる方が きょうの コンサートの 演奏者です。

このように、コミュニケーションの場面において、その話題となっているもの（テーマ）が主語としてさしだされるときには、その主語としておかれる名詞は、形態論的には、「——は」という文法的なかたちをとってあらわされる。そして、話題や関心をめぐっての、あたらしい情報（ニュース）の方が主語としてさしだされるときには、その主語としておかれる名詞は、形態論的には、「——が」という文法的なかたちをとってあらわされる。日本語の文の

内部構造においても、基本的には、主語の位置におかれるのは名詞であって、名詞は主語としての構文論的な・形態論的な文法的なかたちをとって存在するのだが、さらに、通達の構造のなかでの〈話題（テーマ）〉とそれについての〈あたらしい情報（ニュース）〉とのふたつを、分割して文の構造のなかにうつしとる場合には、〈テーマ〉としてさしだされるときには「—— は」という文法的なかたちをとり、〈ニュース〉としてさしだされるときには「—— が」という文法的なかたちをとる。このふたつの文法的なかたちのつかいわけは、〈格〉のカテゴリーにおける問題でもなく、〈とりたて〉のカテゴリーにおける問題でもない。機能的な構造における分割が、このふたつの文法的なかたちのちがいのなかに背負わされている。通達の構造のなかでの、文のこのような機能的な分割のことを言語学の世界では「アクチュアルな分割」とよんでいて、さまざまな言語において、さまざまな言語手段がつかわれているのだろうが、日本語においても、構文論的な配置のし方（語順）と主語におかれる名詞の形態論的な文法的なかたちとが、この機能的な分割のための表現手段となっている。

構文論的な配置としての文法的なかたちを優先して、やはり〈テーマ〉であるものは、「—— は」の文法的なかたちをとって主語の位置におくべきであって、〈ニュース〉であるものは、述語の位置におくべきである、その方が機能的な構造における分割がはっきりするとでもいう場合には、意味的な構造における語順（配置）をひっくりかえてでも、述語の動詞や形容詞にいったん名詞化の手つづき「—— の」かたちをとらせて、「—— のは」という文法的なかたちになる。

- ・ あそこを はしっているのは ぼくの おじいちゃんだよ。
- ・ この 世で いちばん うつくしいのは あなたさます。

こういった機能的な構造における〈テーマ〉の、構文論的な文法的なかたち

(配置的な・語順としてのかたち)の特徴と、主語の「——は」という形態論的な文法的なかたちの特徴は、つぎのような例のなかにもみることができる。ここには意味的な構造としての〈何らかの主体性〉はなく、機能的な構造のみをうつしとっている。

- ・ (食堂での注文の場面で) おれは うなぎだ。  
わたしは とんかつよ。
- ・ (キャンプの場所をきめるとき) ぼくは 海だなあ。  
わたしは 山よ。

これに対して、おなじ構文論的な文法的なかたち(配置・語順)をたもちながら、名詞が「——が」という形態論的な文法的なかたちをとることによって、それが機能的な構造における〈ニュース〉であることをあらわす。

- ・ (家族でマラソン大会の応援にきていて、おにいちゃんの姿をさがしながら) ほら、前から3番目をはしっているのが おにいちゃんだよ。
- ・ (おまつりのときなどに、ペソをかいている小さい子どもに) なにが たべたかったの?  
ほんとは チョコのアイスクリームが たべたかったの。

しかし、名詞が形態論的なしづけをされない〈はだか〉のかたちをとって、文のなかで「前におかれる」場合には、それは〈テーマ〉をさしだすことになる。

- ・ (公園には たくさん 人が いるねえ。絵を かいてる 人も いるよ)  
あの 絵を かいてる 人 ひろしくんの おじいちゃんだよ。



- ・ (小学生でも サッカーチームの なかに 大きい 子が いるねえ)  
あの 大きい 子 わたしの いとこよ。
- ・ (ただいま! おかあさんは?)  
おかあさん いま かいものだよ。

〈はだか〉のかたちであっても、文のなかで「前におかれる」ということによつて機能的な構造のなかでの〈テーマ〉をさしだすというのは、配置(語順)にあらわされる構文論的な文法的なかたちということになるのだろう。

## おわりに

こうして、文のなかでの名詞には、構文論的には「配置のし方(語順)という文法的なかたち」と、形態論的には「膠着的な接尾辞(suffix)のつけくわえという文法的なかたち」とのふたつの存在形式がそなわっている。後者の形態論的な文法的なかたちについて言えば、〈格〉のカテゴリーにおける名詞の変化形をまず基本的な姿ととらえたうえで、①『日本語の名詞は、格助辞をつけた〈格変化の体系〉のなかに存在している』といつても大きなまちがいは言えないだろう。しかし、これまでみてきたように、名詞の形態論的な文法的なかたちにおける「膠着的な接尾辞(suffix)」には、②〈格助辞〉ばかりではなく、〈とりたて〉〈ならべ〉の接尾辞もある。名詞の文法的なかたちは、〈格〉のカテゴリー・〈とりたて〉のカテゴリー・〈ならべ〉のカテゴリーのなかでの存在でもある。さらには、名詞の文法的なかたちのうえには、③文の意味的な構造のなかでの具体性と一般性とのちがいも背負わされる。述語との意味的な関係における「主語の文法的なかたち」のちがいは、〈格〉のカテゴリーにおける文法的なかたちのちがいではない。おなじように、名詞の文法的なかたちのうえには、④文の機能的な構造のなかでのテーマとニュースとのちがいも背負わされる。コミュニケーションのなかでの機能的な構造の関係にお

ける「主語の文法的なかたち」のちがいがまた、〈格〉のカテゴリーにおける文法的なかたちのちがいではない。

名詞のおなじひとつの形態論的な文法的なかたちのなかに、べつべつのカテゴリーにおける文法的な意味・べつべつの構造における意味と機能がかさねあわせられながら、名詞は文のなかに存在している。つまり、ひとつの文法的なかたちのうえに、ことなるレベルにおける文法的な意味が、層をなしているといってもいい。それらは、ときには、たがいの意味がとけあっていて、ひとつひとつを区別することができない場合もあるだろう。きわめてシンプルなフォームのなかに、ことなるレベルにおける文法的な意味や機能がとけあっているのであるから、複雑といえば複雑ということになるのだろう。しかし、「複雑」というのは「単純」のくみあわせということでもある。名詞というものの文法的なかたちのなかに、どのレベルでの文法的な意味が背負わされているのか、そして、その名詞が存在する文それ自体がどういう意味内容をもっているのか、その文がどういう通達の構造のなかでの存在であるのか、こういったことを、具体的にひとつひとつ正確にたどることによって、文のなかでの名詞の文法的なかたちのもつ文法的な意味を確認することは、それほど不可能なことではない。母国語のはなし手は、たとえ無意識にではあっても、確実に文法体系にしたがって文法的なかたちをつかいわけながら、そこに文法的な意味をこめている。